

地域包括支援センター適正運営評価 基本調査票

【地域包括支援センター概要】

センター名称	家島地域包括支援センター
法人名	株式会社デコ・フォルテ
所在地	〒672-0102 姫路市家島町宮2169番地 家島保健福祉サービスセンター4F
電話	079-325-0780
FAX	079-325-0781
ホームページURL	

【センターの案内】

センターまでの交通手段	姫路港から家島行の船で27分。真浦港から徒歩10分。
-------------	----------------------------



【センターが所在する地域の特徴・特性】

家島諸島は島が40余島あり、中でも人が住んでいるのは、家島、坊勢島、男鹿島、西島の4島のみ。

島内の道幅はとても狭くなっているところが多いため、島民の多くはバイクを交通手段としていることが多い。バイクを乗ることができない高齢者などは電動カートやコミュニティバスの利用、家族に車で送迎してもらうことがある。

家島地域の人口はおよそ4500名程度。高齢化率に関しては、令和3年6月時点で姫路市全体では27.0%に対して、家島では50.3%坊勢では31.5%と姫路市の平均と比較してとても高い数値となっている。独居の高齢者も多くなってきているが、地域全体で助け合っていく精神が根付いており、近所づきあいや親戚のつながりがとても強いいため支え合って生活していくことができている。24時間営業のコンビニはないが個人商店があり、足腰が悪くなってしまった方や認知症の方が買い物に来たとしても、自宅までの配達や家族への連絡をしてもらう体制がある。漁師など定年のない職業に就く人が多く、元気な高齢者が多い。

医療資源や介護保険のサービス資源も姫路市街に比べると少ないが、地域で支え合って生活をしていくことができている。島内の救急車は日本でも珍しい軽自動車であり、救急艇も配備されているため、緊急時大きな病院への搬送も可能となっている。

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

高齢世帯が多く、最期は島で過ごしたいと自宅での看取り希望者が多いことがあり、包括がケアプランを担当している人に対して最低でも2か月に1回は看護師が訪問して健康状態のチェックをしてケアプランや個別ケースの対応に生かしている。

いきいき百歳体操・認知症サロンに関しては包括スタッフが毎回継続運営支援をしている。

島内でイノシシ被害が多く、畑や外出をやめてしまうことで、フレイル状態、睡眠障害や鬱などの健康被害につながる件数が増加している。そのため問題解決に向け取り組んでいる。

家島高校で生徒を対象にした認知症サポーター養成講座の実施、地域住民や生徒と共に交通安全教室の参加や防災訓練に参加している。社会福祉協議会と協力し、家島中学校と坊勢中学校で認知症サポーター養成講座を行っている。老人クラブから要請もあり、シルバーヘルパー研修も行っている。

真浦地区の清掃や事業所まわりなど、地域活動に積極的に参加している。

【令和5年度末の担当圏域の目指す姿】

困りごとを地域や個人で抱え込まず相談することで解決策を見つけ出すことができる。
参加者が選択できる通いの場が増える。

地域包括支援センター適正運営評価 評価意見書(総評)

センター名称	姫路市家島地域包括支援センター
実地調査日時	令和3年11月2日

【第三者評価で確認した特徴的な取り組み、工夫点】

2018年度より委託を受け、本年度より、看護師、認知症担当職員が配置され、それぞれの専門性を活かした取り組みが行われている。島から島への移動が大変な中、月に1回の「何でも相談会」を設けたり、2か月に1回は、健康相談として、看護師が担当者を戸別訪問し健康チェックが行われている。

家島諸島全体の歴史、人口の推移、それぞれの島の文化、価値観の相違や言葉などを細やかに調べてファイルに収め、地域診断として活用されている。

医療を含め、他事業所との連携にも取り組まれ、高齢化率の高い島民を支える取り組みに努められている。

【第三者評価で確認した次のステップに向けた気づきや取り組みを期待したい点】

地域包括支援センターの役割や多様な取り組みについて、島民の方々に理解し介護サービス事業所との認識を改めていただけるように「包括だより」を活用し、親しみある内容の掲載など、今後の制作に期待したい。

いきいき百歳体操や認知症サロンなどのリーダーとしてできる人材の発掘や、姫路市フレイルチェック票を活用する取り組みなどに期待したい。

【評価結果に対する地域包括支援センターのコメント】

地域共生社会の実現のため、65歳以上の高齢者のデータ化を今後検討していく。データ化を行う為にも地域との信頼関係を築けるよう、地域の集まりや関係機関に積極的に参加していく。若い世代に対しても、フレイルや認知症など高齢者への理解を深めてもらうための活動を検討していく。

助言を参考に、親しみやすい包括だよりを作成し全戸配布をおこなった結果、島民の方々から「見たよ」とお声かけいただいたりと、包括を知っていただける良い反応が返ってきている。

【備考・その他】

島内でイノシシ被害が多く、畑や外出をやめてしまうことで、フレイル状態、睡眠障害や鬱などの健康被害につながる件数が増加している。そのため問題解決に向け、日常を取戻し今まで通りの生活ができるよう取り組みされていた。

評価項目・着眼点	基本目標1:生きがいを感じながら暮らすための支援の充実	
	(基本的な考え方) 人生100年時代、介護予防に努め、いつまでも自分らしく、生き生きと暮らすことが大切です。そのために、身近な地域活動への参加を増やし、継続することが必要となります。その生活スタイルを周知するとともに、地域活動の場へ通い続けることができる環境づくり、地域で役割をもって暮らすための地域づくりに取り組みます。	
	①	介護予防に関する認識の变革 85歳以上の高齢者に対し、「通いの場」である「いきいき百歳体操」と「認知症サロン」への参加促進を行い、フレイル予防につなげる。 市民向け講座などでフレイル予防に関する啓発・周知を進めフレイルの危険因子を持つ人等を早期に発見する取り組みを進める。
	②	高齢者が通える場があるまちづくり 介護予防への意識が高くない高齢者を通いの場に誘導するとともに、フレイル等で通いの場への参加が中断することを予防するための取り組みを充実させる。
センター記入欄	取り組みの状況	いきいき百歳体操・認知症サロンに関して、毎回包括のスタッフが継続運営支援に行くことができている。役員の方々と協力し、こまめに連絡を取り合い、フレイル予防についての健康に関する周知啓発活動や、認知症サポーター養成講座の実施をするなどして飽きることがないような工夫をしている。フレイルチェック票をとり、いきいき百歳体操、認知症サロンに来ている人の健康状態の把握を行っている。
	現在課題と感じていること	新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が発令され、開催場所の都合上いきいき百歳体操・認知症サロンなどの通いの場の開催ができない状態になる。いきいき百歳体操やミニデイ、ふれあい喫茶などの地域の方たちの通いの場がなくなることで、自宅にこもりがちになり、フレイル傾向にある人が増えているが、現在有効な対策を見つけることができていない。
	目標達成のための今後の取り組み	いきいき百歳体操・認知症サロンを継続するため、認知症予防やフレイル予防についての、周知啓発の活動をしたり、様々な体操を提案したりしていくことで飽きのこない通いの場になるよう支援していく。 フレイル傾向がある高齢者に対して、いきいき百歳体操だけでなく、ミニデイやふれあい喫茶などの地域の集まりに参加するよう勧めていく。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	コロナ禍の中で、参加者が少なく、外出ままならない地域で高齢者が生き生きと暮らす事が出来るためにコミュニティバスを活用し、参加の機会を増やし、健康作りの声かけを主として認知症サロン、ミニデイ、ふれあい喫茶など地域の方々が通ってふれあう場所の工夫とフレイル予防につなげるべきミニデイにも参加し、介護予防の説明をするなど、あきのこない様に内容に変化も持たせ、啓発活動やシルバー老人クラブの方々とも情報共有している。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	高齢者はもとより地域の方々に地域包括支援センターの取り組みなどに関心をもっていただくよう工夫をするとともに、65才以上の高齢者のデータ化を進めていくことを期待したい。

評価項目・着眼点	基本目標2: 困りごとを地域全体で受け止める体制の構築	
	(基本的な考え方) 日常生活圏域単位に市民に身近な場所への地域包括支援センターの設置を継続し、地域の高齢者、その介護者の生活スタイルに対応できる相談体制の強化を行います。困りごとを抱える高齢者やその家族への支援を行う中で、地域共生社会の実現に向けて、他との連携を進めていきます。	
	①	地域包括支援センターの運営 地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割を持っていることを地域で認識されるようになる。
	②	地域包括支援センターの機能強化 地域包括支援センターの専門性を活かした相談機能を強化する。
	③	世代や分野を超えた地域のつながりの構築 地域共生社会の実現に向け他分野との連携を強化する。
センター記入欄	取り組みの状況	坊勢では地域包括の事務所がなく、相談窓口がないため、坊勢なんでも相談会を毎月第3火曜日に開催している。 ミニデイやいきいき百歳体操などで地域包括支援センターの活動内容の普及啓発活動を行っている。毎日朝礼を行い担当者の状況を共有し、専門職のスキルを生かしながらチームの中で相談することで、今後の対応やケアプランに生かしている。また各個人のスケジュールを共有し合うことで業務調整を行い、効率的に業務が行うことができるようにしている。
	現在課題と感じていること	坊勢には自分たちの問題は自分たちで解決をしようという風土があり、坊勢なんでも相談会を開催しているが来所される方が少なく、困っている人が相談できる場に行けるよう今後検討していく。坊勢のいきいき百歳体操が新型コロナウイルス感染症のため休止しており、再開を目指していく。 地域包括支援センターは介護保険についてのみ対応する所だと思っている人が多い。また地域住民に対してどのような介護保険サービスがあり、どうしたら利用できるのかが浸透していない。
	目標達成のための今後の取り組み	坊勢で地域包括支援センターの相談支援を積極的に行っていく。 各専門職が毎日の朝礼で情報共有を行い、意見交換を行うことでケアプランや今後の対応に生かしていく。 地域包括支援センターが介護サービス以外にも相談対応ができることを地域の集まりや個別の訪問などで周知していく。 地域支えあい会議を開催し、関係機関と連携強化していく。 スタッフ全員がチームとなって地域住民への総合相談やサポートを行っていく。
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	目標達成のために困難事例から意見交換を積極的に行い、介護サービス、障害サービスに関係なく居宅介護支援事業所や、施設などと地域支えあい会議を開催し、連携の強化を図っている。また、なじみの商店、消防署、警察署等、各方面の繋がりをもち、地域で見守る環境も整備されている。
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	保健センター、各学校関係にも地域包括支援センターの啓発活動に協力が得られるよう取り組みの工夫に期待したい。

評価項目・着眼点	基本目標3: 地域で暮らし続けるための支援の充実	
	虚弱・軽度要介護者の重度化防止、自立支援のために、地域活動への参加など多様なサービスの活用を図ります。	
	①	<p>多様なサービスの活用</p> <p>地域の通いの場や多様な主体で展開される介護予防生活支援サービス、在宅医療・介護の連携体制及び認知症高齢者等への支援に係るサービス(地域支援事業)を効果的に活用して、虚弱・軽度要介護高齢者の重度化予防・自立支援を図る。そのために、地域包括支援センターが担う取り組みや事業としては、地域ケア会議推進事業、生活支援体制整備事業、通いの場の充実、認知症の人への支援などがあげられる。</p>
センター記入欄	取り組みの状況	<p>いきいき百歳体操や認知症サロンについては、継続ができるよう役員の方々と普段から連絡を取り合っており、緊急事態宣言解除後にはすぐ地域の集まりの場が再開できるよう準備をしている。</p> <p>家島地域包括支援センターが担当してケアプラン作成をしている方は看護師が最低でも2ヶ月に1回は訪問し、健康状態の把握を行っている。また社会福祉士や認知症担当職員は日々の生活や心と体の相談、家族問題の相談事などを中心に支援している。</p>
	現在課題と感じていること	<p>家島地域は、離島地域であり、各島で文化や歴史、方言や風土も違い、コミュニティの強さも違う。姫路市街と比較しても医療・介護・福祉などの資源が少なく、入院できる病院もない。また介護保険サービスの選択肢も少ない。高齢化率が高くなり、自宅での看取り希望が多くある地域であるため、新型コロナウイルス感染症が拡大する中でも、最期まで安心して自宅で過ごすために地域に合った支援を考えて行く必要がある。</p>
	目標達成のための今後の取り組み	<p>いきいき百歳体操が継続できるよう、こまめに役員の方々と連絡を取り合い、参加者の要望を確認しながら、飽きのない通いの場になるよう運営支援を行っていく。</p> <p>一人一人に合わせたケアプランを作成し、地域住民が安心して家島地域で最期まで暮らすことができるよう支援をしていく。</p> <p>医療機関や関係する各事業所と、こまめに連絡をとり合ったり面談などをしたりすることで、関係強化していく。</p>
評価調査者記入欄	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	<p>離島地域のため入院出来る病院もなく、姫路市内への移送となることから病院のソーシャルワーカー、最寄りの飾磨地域包括支援センターにも情報共有している。また、ZOOMにて居宅介護支援事業所との連携を図り、研修に参加している。</p>
	次のステップに向けた気づきや期待したい点	<p>民生委員とケアマネジャーとの交流の場を持ち、家島地域包括支援センターの特性を活かした取り組みに期待したい。</p>

評価項目・着眼点	基本目標4：認知症とともに暮らす地域の実現	
	認知症は誰もがなりうるものであり、認知症になっても、住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる共生社会を目指します。また、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防(認知症になるのを遅らせる。認知症になっても進行を緩やかにする)に関する取り組みを推進します。	
	①	認知症にやさしい地域づくり 認知症サポーターが地域で活躍できる機会の充実を図る。認知症の本人が、自身の希望や必要としていること等を本人同士で語り合う場を設置する。
	②	認知症になるのを遅らせるための取り組み 高齢者が身近に通える場等の拡充。通いの場を活用し、認知機能低下がある人や、認知症の人に対して、早期発見・早期対応が行えるよう、医療機関とも連携した支援体制の整備。
センター記入欄	③	認知症になっても地域で暮らし続けるための取り組み 認知症の種類や進行段階、生活環境に応じた適時・適切な医療・介護に提供が出来るようになる。
	取り組みの状況	普段から地域の集まりや訪問時などで認知症についての周知啓発や、認知症になってしまった人への対応の仕方などを伝えている。そして地域に認知症疑いの人がいれば認知症の診断ができる病院へつなげている。受診後はその人の状態や生活環境など一人一人に合わせて対応している。認知症の方が郵便局や銀行などに来たときに家族へ連絡をとるなど、認知症になってしまった方がいたとしても地域全体で受け入れる体制がある。
	現在課題と感じていること	高齢化率の増加や新型コロナウイルス感染症の流行に合わせて運動機能や認知機能の低下がみられる方が増加してきている。原因としては新型コロナウイルスに感染したくないと考える方が多く、外出機会が減少し、近所の人と会話する回数や時間も減少してきていることがあげられるが、有効な対策を講じることが難しい。地域全体で認知症の方の受け入れができてい一方、地域の方と話をすると、まだ認知症の方への対応など周知できていないと感じることが多くある。
評価調査者記入欄	目標達成のための今後の取り組み	認知症になったとしても家島地域で最期まで生活できるよう、本人や家族も含めてサポートしていくことができるような体制を作っていく。認知症について理解が低い住民に対して説明ができるよう、スタッフも勉強し、周知啓発活動を行っていく。
	評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点	コロナ禍で中止していた「認知症サポーター養成講座」を令和3年度に2回開催し、中学校で積極的に参加を呼びかけ地域住民の一員としての役割を担っていただくことを目的として啓発を行っている。今後は小学校にも開催の準備をするなど、地域住民で早期発見につながる工夫がうかがえる。
評価調査者記入欄	次のステップに向けた気づきや期待したい点	老人会、婦人会の協力を得て、若い世代での教育・教養の必要性和フレイル予防の意義を理解出来るよう、取り組みの工夫に期待したい。